

# オリーブの森に佇む看護大学づくりの話

片野 光男

学校法人福岡女学院理事長

私は、多くの時間を医師として、研究・教育・診療に関わってきたが、運営の責任を背負うのは初めての経験である。そんな私が今言えるのは、運営に関わる者は教学を意識し、教学に関わる者は運営を意識すべきという当然の思いだ。ここでは、思いつくままに話をさせていたきたい。結婚当初、時折、妻と「子どもに何を残すべきだろうか？」といった話をしてきた。私たちが死んだ後、この子を慰め支えてくれるのはお金だろうか？友人だろうか？仕事だろうか？といった話だ。そんなある日曜日朝、突然足元から「おまえは愛を知らない」という言葉が聞こえたのである。私は、人には優しく接していると思いついて、何を言っているのか理解できなかった。ふと、ちゃぶ台の上の妻の聖書が目にとまり開くと「コリント人への手紙Ⅰ：13章」だった。このページに書かれている「愛」は私が考えていた愛とは全く別物で、この時「おまえは愛を知らない」という言葉の意味

がしみ渡ってきた。この出来事を妻と話し合い、子供に残すべきものは信仰という結論に達し、私たち親子は揃ってキリスト教の洗礼を受けたのである。私が35歳の時だった。その後、聖書に書かれている愛の一部が実行できたり、どれ1つ実行できなくなったりを繰り返し今日まで生きてきた。しかし、「愛を知らない」という言葉を聞いたことが、私の心を穏やかにしてくれている。この言葉は「意識して生きる」ことの意味を優しく教えてくれているような気がする。そんな訳で、学生には、「志高く、身を整え、敬を持ってキャンパスの門をくぐりましょう。門をくぐる時は、空を見上げるようにしましょう。門を入ったら、心の時間軸を長めに調節し直しましょう。道端や建物の中では、顔を上げ、中央ではなく端をさっそうと歩きましょう」という言葉を投げかけさせていただいている。

話は2015年に飛ぶが、私は九州大学を定年後、137年の歴史を持つ福岡女学

院の2008年に開設された看護大学に学長としてやってきた。スペイン瓦のおしゃれな建物が青空に突き刺さるように輝いていた。その瞬間、この大学をオリーブの森に佇む看護大学にしたいという想いが溢れてきた。なぜオリーブなのか？ということだが、第1の理由は私がオリーブの木が大好きだということだ。オリーブはノアの方舟や国連の旗に描かれているように平和のシンボルで、常緑樹で虫がつきにくいといったキリスト教を基盤とする女子大学に相応しいということもある。が、本当の理由は教育の基本である「互いをかけがえの無い存在として愛する大切さ」を教えてくれるからだ。オリーブは1種類だけでも花を咲かせることはできるが、実を結ぶには、近くに他の種類のオリーブが存在する必要がある。例えば、10種類のオリーブを植えた場合、どのオリーブも実をつけるが、自分はこのオリーブの花粉によって実をつけたのか、自分はこのオリーブの役

に立ったのかは分からない。もっと素敵なこととは、実を結ぶには、AはAであること、BはBであることが必要だということである。くどくなるが、あなたであることが誰かに実を結ばせており、同時にあなたの実も誰かが結ばせた、ということだ。そして、より多くの実を結ばせることを望むならすくすくと育ちなさいということである。オリーブ自身は太陽の光と水はけの良い土さえあれば多くを望まない。成長が早く、短い学生生活の間にぐんぐん成長する姿を目にすることができ。こうして、現在7種類200本のオリーブが植えられ、2019年には第1回オリーブ摘みとオリーブオイル採取、2020年に第1回「オリーブ祭」、そして2022年に念願の卒業式での自家製オリーブオイル贈呈を実施する。お近くにお越しの際は、ぜひ立ち寄りいただきたい。

1年先を思う人は花を、10年先を思う人は木を、100年先を思う人は人を育てなさい。